委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第86巻の表紙写真を募集（テーマ：農村地域における農業施設・構造物：先人たちの技術と苦労が垣間見える造形美，平成29年9月30日締切）したところ，30点の応募がありました。10月25月に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し，12点を選定したので，ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では，学会誌第87巻（平成31年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし，表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は，本誌会告（80ページ）をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講　評

柳本　尚規（東京造形大学名誉教授）

とうとう「フィルムってなんですか」という質問も受けるようになった。生まれたときからもうデジタルという人たちが大人になってきているのだから自然なことなのかもしれないが，そのデジタルでさえコンパクトなカメラがほしいという友だちの頼みを受けて量販店に行くと，コンパクトデジカメ（コンデジ）というカテゴリーのカメラはもうほとんど製造されなくなって流通がなくなっていた。なぜか。スマホのカメラが良くなってコンデジが売れなくなってしまったから，だという。

売り場を歩くと，そういえばプリンターも品数が少ない。フラッドベッド・スキャナーももうないし，スティックメモリーのようなものも探すのに手間が掛かる。パソコンまわりの事情もずいぶん変わってきた。

メールやLINEを使えばプリンターは要らないし，複写（のようなこと）もスマホで十分に足りる，残しておきたいデータもクラウドに送っておけば手許にはスマホだけあれば事足りる，ということになってきている。クロネコは知っているけれど切手の買い方が分からないという学生もいた。こういうことを嘆いているのではない。ダメだと思っているのでもない。

そういう方法でとられた写真（といっていいのかどうか）をどうやって見ているのだろうか，ということが気になっているのである。

私もデジタルカメラを使うけれども一枚の消去も出来なくてみなメディアに保存している。それを見るときはデスクトップパソコンにつながった机上のモニターで見て，紙焼き（古い言い方だが）もフォトプリント用のペーパーを使って，これは暗室作業でついた癖なのかもしれないが，何枚かのプリントをつくってみて選ぶ。すると，少なくともこれだけでもモニターとはずいぶん違ったイメージがモノ化する。

いろいろ言いたいことはあるのだが，ここではせめて六つ切りほどのサイズ（A4くらいに，と言わなければ分かってもらえなくなってきているが）のプリントをつくり，そしてその中から写真を選ぶというようにしてほしいということだけにしよう。

考え方にもよるが，デジタル写真には最終版という打ち止めがない。モニターで見るのも，プリントもとりあえず，どうにでもなる，中途のものだと考えがちだ。メディアの特性としてはそうであっても，「写真」というなら最終版としてのプリントをつくった方がよいと思う。プリントされたものを見るのと，モニター上だけで見るのとでは，写っているものへのスタンス感が違うのではないかと思うからだ。

プリントをしない，プリントの出来不出来に関心がなくなる，写した動機への愛着が薄まる，写っている対象への関心も薄らぐ。と，こういう堂々巡りには染まってしまうのはつまらない。

楽しいような不安でもある時代にいま私たちはいます。そんな中で便利な道具を使ってよりじっくり＜見る＞流儀を早く身につけたいものだといつも思っています。みなさんもどうぞこのことをちょっと頭の片隅において，魅力ある施設や構築物とそれらとともにある風景を，少しの美意識も懲らして見つめてみてはいかがでしょうか。そして，ていねいに一点一点をプリントして，それを作品として独立させる楽しさも味わってみていただきたいと思います。

第86巻表紙写真入選作品

1月号

山間で，静かに存在感を示す冬の奥池
（本條忠應）

奥池は三方を山に囲まれた津ノ郷盆地にあって，南西部方向には飯野山を富士山然として遠望できる。もちろんだからこの山は讃岐富士と呼ばれて親しまれているが，日本にはこのように富士の別称をもつ山々がじつに多い。

東京にもたくさんの富士塚があり，海を渡って移住した南米など各地にも，富士と名付ける小山があったり中にはわざわざ土を盛ってつくられた富士があるくらい，富士山に対する思いは深い。それを見て心が和む，勇気が湧いてくるという，不動の山容への思い入れがあるからだろう。

盆地の中央には大東川が流れその両岸に豊かな農地が広がっている。

興味深いのはそういう実用としてのため池をつくるにあたっても，逆さ富士の絵と見立てるような発想があったということを教えられることだ。実用から生まれてそれを超えた＜用の美＞を生活の中で愛でようと思ったからなのだろうか。

2月号

大地への送水（国営諫早湾干拓事業中央揚水機場）
（渡邉圭四郎）

諫早湾の最奥部を閉じるかたちの潮受け堤防によって調整池ができたが，そこに流れ込む本明川の水を取り込むのが写真の揚水機場である。機場建屋の右側には，広大な農地が整然と広がっている。その用水を充たすのがこの建屋からの水管。

諫早湾の干拓は古い時代から始まっているが，浸水や塩害によって被害と隣り合わせの農地だった。それが水門による湾奥部の淡水化によって安定した農業用地に変貌した。

この写真は，見ているとふと遠近感が分からなくなってきて面白い。水を揚げ，分岐して配る。このシステムの模式図あるいはジオラマを見ている感じすらする。

人工の大地にあってはこのように人為が分かりやすくなる。同時にそれは人工ではない自然の地形にと置き換えた場合はどうだろうか，という想像も促すだろう。

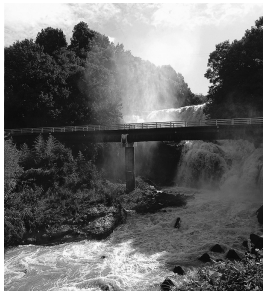
3月号

地域の農業と水のコントロール―大平野の水田地帯―
（樽屋啓之）

ガラスを多用した現代建築の壁面のようだ。この田地は，春の水張り，夏の稲穂というさまざまな情景をまるでCGに見せるのではないか。大きなモニターがタイルのように地に並べられているとも思える景観である。強調された水面の光がそう思わせる。うねうねと続く不規則な山稜の棚田も美しいが，このグリッドもなかなかのものだ。

この水田は，九頭竜川から導水され，用水すべての供給は地下からパイプラインによってなされている。福井平野は福井県最大の平野で，面積は福井県全体の4分の1に相当する広さ，県内人口の6割近くが生活しているところだそうだ。九頭竜川によって運ばれた土砂による堆積平野は肥沃だが排水が悪い，くわえて名にし負う暴れ川と言われた九頭竜川。そこで大規模な利水・治水事業が行われて写真のような景観を生み出すことになったわけだ。水を完膚なきまでに治めるとこういう景観が生まれるのかと見とれてしまう典型である。

4月号



岩山を切り取った「余水吐」から，連なる瀑布と流下する洪水
（本條忠應）

香川県の観音寺の一帯にある沼，ため池の数は相当なものだ。それらはいかに灌漑用水の確保に難儀していたところだったかを教えてくれる。

井関池もその一つ。そして写真の余水吐はその池の決壊の歴史の産物で，写真にある勇壮な模様は災害を食い止めるための強い意志のあらわれだったのだろうと想像できる。臨場感あふれる写真だ。写真では人工的な構築物ではなく自然がつくった地形のように見えるけれども，自然に倣った構築物である。

井関池が築かれるまでは相当な荒れ地，原野だった。しかし，新田開墾の気運の高まりによってその原野を農地にしようという計画ができ，川を堰き止めてため池をつくる難工事が進められた。そしていま，香川用水の通水後は井関池も余裕のたたずまいを見せていられるようになったようで，まわりは公園化し，桜，ツツジが堤防を彩って井関池の貢献の歴史を偲ばせるところになっている。

5月号

青空の釜之口井堰（近田昌樹）

利権の争いのすべてが今や恩讐の彼方，といった感じのじつにすっきりとした堰，頭首工の写真である。用水路をめぐるいざこざなどは少しもなかったと言わんばかりだ。

写真の地点は愛媛県西条市に広がる周桑（しゅうそう）平野，あるいは道前平野とも呼ばれるところ。そこを東西に貫流する中山川にある施設。

水の乏しいこの地域ではその中山川からの導水がながく争いの歴史を残してきた。中山川は深い浸食谷を流れ，中流部からは扇状地を形成する取水に難しい川。扇状地上流部で頻発する洪水と大量の土砂，堆砂への対応にあけくれた井堰がこの釜之口堰である。数多い補修，改修を経て堰は安定した用水をもたらし，いまは温暖な気候と肥沃な土壌条件を生かした豊かな農地として，米をはじめ麦，野菜，果樹の生産が盛んであるとのこと。しかしあらためて気候データを見るとこの地域の年間降水量は全国平均の7割程度で，くわえて河川流域の地勢である。用水の確保と分配にどれほどの苦労，知恵を必要とされたことだろうか。

6月号

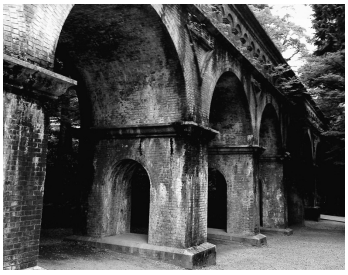
千框（せんがまち）棚田を生かす水
（岡澤　宏）

大規模な幾何学的形状の田圃とは違った，なんとも人心地のする景観である。機械を入れるのも一苦労だろう，その操作もたいへんだろう，何から何まで人の手を煩わせなければなりたたなかったような小さな框（かまち）に水が湛えられて空を映し風にそよぐ，その空間が＜故郷＞の原風景観をいざなってしきりだ。けれんのない写真。

千框棚田はJR東海道本線の車中からも見られるが，框というのは「床などの端にわたす化粧横木」の意味の方が一般的。障子の枠のことも「框」という（「広辞苑」）が，同様に田んぼや畑はそもそも地を枠で囲ったもの，つまり地の框である。

「千框棚田」はたくさんの意味で「千」が使われている。が，実際は2,000框。その内の35％が田んぼ，65％が茶草場（ちゃぐさば）だという。茶園の畝間に植生するにススキやササを茶草といい，秋から冬にかけてこの茶草場で刈り取った草を茶の木の根元や畝間に敷く。茶草が土に還って茶に一段の味と香りをもたらすのだという。

7月号



大切な水を運ぶ煉瓦造りの連続アーチ
（藤原正幸）

ふと古い大学の構内を思わせるたたずまいだ。明治および戦前に建てられた大学や銀行，役所のような社会基盤をなすところの建物は，強固で風雪に耐えうる存在感を表すかのように，とても意志的である。ヨーロッパ中世の教会はその強大さを示すように大空に向かった荒々しいが荘厳な姿につくられていて，それらはおしなべてゴシック建築と呼ばれている。写真の疎水を渡す水路橋もローマの水道橋を手本に構想されたそうで，その建築様式の由来を引き継いでいるようだ。永年に不動であるべきものだという意志が漂っている。

京都市中に水を運ぶ琵琶湖疎水の用途は，灌漑，上水道，水運などじつに多様で，また流路も複雑でトンネルあり，写真のような水路橋あり，とさまざまな施設によってリレーされている。

水を運ぶ施設の重要性はどこにあっても同じだが，南禅寺境内に突然現れるこの水路橋は，まるでその意味を額に入れて観賞させる趣もあっていい姿である。

8月号

大規模パイプラインの調圧水槽
（西岡　伸）

用水路のパイプラインシステム化のキーマンであるこの巨大な水槽はどこからでも大きな目印となる。つまりそのものの存在感を一見にして広く伝える。城も塔もその支配者の権威を誇示するものだったとしたら，この大きな調圧水槽も，権威というものではないが農地の安全を導く灯台のようなシンボルとなっているだろう。

坂井平野は福井県の北部にあって福井平野の一部をなすところ。そして十郷用水は坂井平野を流れる農業用水。九頭竜川の水を引く。古い歴史のある用水路だが，老朽化し水質も悪化したため地下のパイプラインシステムに切り替えられ最近になって供用開始となった。十数年間の工事である。そして，パイプラインを流れる用水の水圧を調整するのが高さが30 m という大きな「十郷調圧水槽」。

風なびく水田を従えるように建つ水槽は，その下にパイプを張りめぐらせている。それは大木の根のようだと思ってみると，自然と人工の共同作用の妙も見えてきて楽しい。

9月号

二ヶ領宿河原堰（岡澤　宏）

新宿と江ノ島・箱根を結ぶ小田急線は，東京・狛江市の和泉多摩川駅と神奈川・川崎市の登戸駅の間で多摩川を渡る。その時，鉄道橋の下流方向にこの写真の宿河原堰が見える。夕方になると西日でシルエットになるその姿が美しい。

多摩川氾濫のあの場所である。昭和49（1974）年の台風16号による洪水。川そばの民家19棟が流失していく様子はテレビ中継され釘付けにされた。その氾濫からもう40年以上が経つ。堰の爆破という荒技によって被害の拡大を食い止めたのだが，いまある宿河原堰は破壊された堰の少し下流に新たに造りなおされたものだ。

江戸時代，多摩川から稲毛領と川崎領の耕作地に用水が運ばれたので二ヶ領の呼び名がつくが，いまはもう宅地化が進んで工業用水や環境用水として使われることが多くなった。

ここでは過去を呼び覚ます堰の姿が静かに画像化されて遠望感が強調されている。空が主役か，川が主役か，堰が主役か，どれとも特定しない視線で，その視線が自然の大きな営みを思わせるのかもしれない。

10月号

通潤橋―通水石管の補修―（林田　創）

水路橋の修理工事。この通潤橋の美しい姿はもう十分に知られているところなのでどこをどう修理しているところかは一目瞭然だろう。30 cm 角の穴をくり貫いた90 cm 角の石をつないだ水路管が3列。ああ観光客はこの上を歩いていたのかと教えられるとともに，景観優先であまり見られなかった角度からの姿が，工事写真のタイプをもってその構造までもが表された。

「通潤橋」は2016年の熊本地震によって損傷を受けた。石管から多量の漏水が生じ，それは石管の目地である漆喰の破損によるものだったので，それを機会に今は大規模な修理の最中であるという。通水管の漆喰によるつなぎ目という＜技術＞にもいまさらながら驚かされる。通潤橋といえば通水管に詰まった堆積物を取り除くための放水の光景ばかりが頭に残っていたが，改修工事を見せる意図から撮られたこの別の表情に，歴史的な建築性をあらためて教えられた。

11月号

富士山麓の水田地帯を守る―昭和放水路―
（小長井正道）

富士市の東に造成された水路。駿河湾に注ぐ。湛水被害を取り除くため，とある。東海道を横切る一級河川だ。

写真は，画面に電柱やガードレールという現代社会の形こそ見えるものの，一見するとこの光景はいつの時代か少しとまどう。場所も富士山という固有なものを除けば，日本中の至る所に見られる冬ざれた景色だ。しかしそれが春になって緑があふれ豊かな農地となるサイクルを想像させる。昔から続く農地の姿が想像できる。その落差によって，育まれた季節感もある。自然の営みをこうした景色から教えられてきたのである。

この放水路の先，駿河湾への放水口は釣り人にも知られた所として有名なのだそうだ。真水が注ぎ込む汽水域は魚介類のゆりかごとも言われるのだそうで，マゴチやクロダイ，スズキなど，汽水域を好む魚が侵入してくる。枯れ草の間を縫って流れるこの放水路の先に，そんな魚が集まってくる場所ができているのを思うことも楽しい。

12月号

段々（みかん）畑と雲海（渡邉圭四郎）

「河内みかん」の段々畑。写真の段々畑は，とくに石垣が美しい。ここも2016年4月の熊本地震によって石垣の崩落などの被害が多発した。

みかん。蜜柑。口に出してみると目にはくっきりとあの橙色の鮮やかな果実が目に浮かんでくる。ふと芥川龍之介の「蜜柑」を思いだした。これは鬱屈して沈んだ乗客の心理が吐露される短い小説である。発車間際，自分一人だけの二等客車席に，垢じみて頬もヒビだらけで真っ赤で霜焼けの手に三等席の切符をしっかり握った小娘が乗り込んでくる。汽車が走り出すと間もなく小娘は窓を開けて線路脇の田の上で待つ弟とおぼしき子供に向かって蜜柑を投げるのである。小娘の振る舞いを不快に思っていた乗客の男は「私はこの時始めて，云いようのない疲労と倦怠とを，そうして又不可解な，下等な，退屈な人生を僅かに忘れることが出来た」と思う。そうさせたのが「小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと，そうしてその上に乱落する鮮やかな蜜柑の色……」だったと。共感が湧くのは，それほど蜜柑の色に引き起こされる郷愁感が強いからである。